

●どれだけのものが建つのか？

多くの住民は、「また鉄塔が建つ」くらいの感覚で風車をイメージしているのではないのでしょうか。しかし、2500kw級の巨大風車というのはそんな生やさしいものではありません。羽根の直径は100m。それを支えるタワーは75m、85m、100mなどがありますが、標準的な85mのポールと組み合わせたときの全高は135mになります。高さ135mの建造物とはどんなものでしょうか。

福島県内の建造物を例にとると、塩屋崎灯台は27m、いわきマリンタワーが60mです。つまり、マリンタワーの倍以上の高さがあるのです。

県内で最も高い人工建造物は郡山西口の高層ビル「ビッグアイ」で、133mです。135mの風車というのは、ビッグアイと同程度と考えればいいでしょう。

川内村、いわき市の重要な水源地になっている大津辺山、黒佛木山山頂をすっきり囲む形で「ビッグアイ」が26も並んでいる光景を想像してみてください。

●生コン車3000台分のコンクリートが流し込まれる

タワー部分は鉄でできており、中は空洞です。このタワーを支える土台部分は、地下数十メートルまで掘り下げられて、大量のコンクリートを流し込んで作られます（写真）。



↑滝根小白井風力発電建設現場 2009年9月撮影

横浜市が建設した1980kwの風車「ハマウィング」は、タワーが78m、羽根の直径が80mという、2500kw風車よりは小さな風車ですが、この風車1基の基礎工事に使用されたコンクリートは約530立方メートル。生コン車延べ106台の量であると公表されています。これは1基についての量です。

となると、それより大きな2500kw風車26基では、どれだけのコンクリートが流し込まれるのでしょうか。ざっと計算しても生コン車3000台分はあるでしょう。それだけのコンクリートが、私たちの

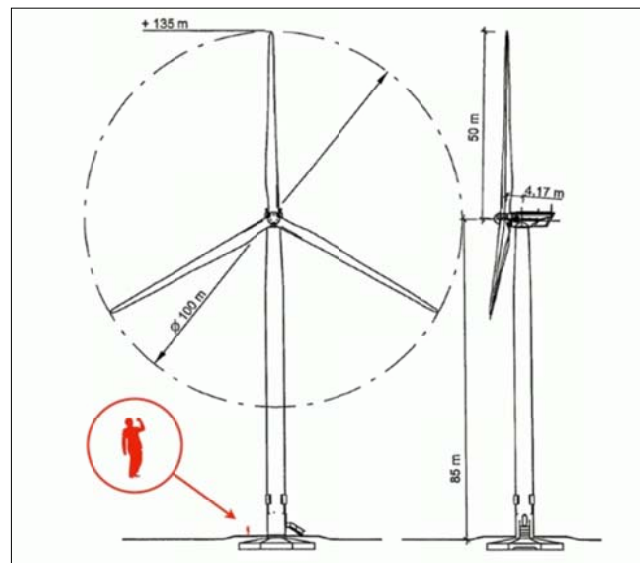
村の飲料水や農業を支えてきた大津辺山、黒佛木山に流し込まれるのです。

小さな工事でも、地下水流が変わり、井戸が涸れ、沢が涸れることはよくあります。水源地の山を地下数十メートルまで掘り下げ、生コン車3000台分のコンクリートを流し込めば、どうなるのでしょうか。滝根小白井では表土の緑が失われ泥水が夏井川に流入したため、岩魚や山女が産卵できなくなり、夏井川漁協が風力発電事業者に補償を求めています。

●付近住民は一生「風車病」と向き合うことに

昨年あたりから、テレビや新聞でもようやく報道し始めましたが、巨大風車が発する低周波、超低周波（耳には聞こえない振動）が原因と思われる、頭痛、めまい、血圧上昇、鼻血、不眠、いらいら、といった健康被害、通称「風車病」が問題になっています。

すでに風車が稼働している地区では、最初は風車を歓迎していた住民が、風車稼働後に地



獄の苦しみを味わうことになり、悲惨な状況を呈しています。

渥美半島や伊豆半島では、夜間に苦しくて眠れず、車で風車から離れた場所に移動して車中泊したり、夜寝るためのアパートを別の場所に借りたりしている住民がいます。

住むのを諦めて移転していった人たちもいます。こうした人たちの訴えはすべて「風車が原因とは認められない」「科学的に証明されていない」「騒音を測定してみても、基準値以下なので問題ない」などと言われ、なんの補償も受けられません。

移転しようにも、そばに風車が建ってしまった土地を買う人はいませんから、転居費用が得られません。

「環境にいいものだと言われて受け入れたのに、なんでこんな目に合わなければいけないのか」「風車は計画を認めたらおしまい。二度と元の生活には戻れない」

こうした悲痛な声が、ここにきてようやく新聞やテレビでも取り上げられるようになりました。

風車病はその原因構造の解明がまだほとんどされていません。個人差が大きいことも特徴で、同じ家に住んでいながら、夫は何も感じず、妻は耐えきれずに家を出て別居、というケースもあります。概して、症状は、老人や女性などのほうが早く現れるようです。最初は何も感じなかった人も、2年、3年経って、突然痛み始めることがあります。

風車病は、何をどう訴えたところで、行政にも事業者にも相手にしてもらえません。

水俣病の原因が、地元最大手企業「チッソ」が垂れ流した水銀であると指摘されてから、国がそのことを認めるまでには12年かかりました。あれだけはっきりした因果関係がある公害でさえそうなのですから、ましてや低周波などという目に見えない、耳にも聞こえないものが原因の健康被害が公的に認められることなど、まず期待できません。

しかし、証明されていようがまいが、現実には、風車が稼働後、付近の住民は苦しんでいるのです。苦しみながら、泣く泣く家を捨てたり、別居したりしているのです。

●発電しなくてもいいのです。補助金がいただけますから

三重県の青山高原（布引山地）にあるウインドパーク美里（2000kw級8基）では、2006年の完成直後から故障が頻発し、今年（2009年）2月からは8基中6基が停止したままです。要するに使い物になっていないのですが、それでも事業者は新たにウインドパーク笠取（2000kw×40基）を現在建設中です。事業者が行政に口癖のように言っているのが、

「風力発電は発電しなくてもいいのです。補助金をいただけるので、建設するのです」

という驚くべき言葉です。風が吹かなければ発電量はゼロ。今から30分後に発電しているかどうかさえ予測がつかない風力発電が使い物にならないことは、事業者がいちばんよく知っています。それでも「国策」として税金が投入され、強行されるのです。周辺住民の生活を、人生をめちゃめちゃにしたあげく、最後は八ツ場ダムのようなことになるのでしょうか。

●一時の金と引き替えに、村を殺してもいいのか？

しかし、この「理由なんかどうでもいい。建ててしまえばいい」という感覚は、住民の側にもないとは言えません。

「風車に限らず、工事で金が落ちればよい。そのために自然が破壊されようが、他の住民が苦しもうが、それは仕方のないことだ。今までもこの村はそうだった」

……そう考える人もいるかもしれません。

しかし、生活基盤の破壊や健康被害など、取り返しのつかない結果と引き替えに、一時的に入ってくる金を天秤にかけていいのでしょうか。

隙を見れば、事業者はとことんそこに入り込んでいきます。地元へ落ちる金の話だけをして、マイナス面は絶対に言いません。事業者の甘言を信じたほうが楽だという気持ちは分かりますが、一旦受け入れたら最後、この村は生活ができない、未来のない村になるのです。

●最後は超巨大なゴミの山になる

風車の耐用年数は15～20年と言われていています（法定耐用年数は17年）。しかし、実際には落雷や強風などで簡単に壊れてしまい、試験運転を始めた途端に運転を停止せざるをえないような例が全国各地で見受けられます。御前崎の公営風車はメーカー保証期間の2年が過ぎた後は、修理費用が出せず、諦めて放置されています。東伊豆でも、強風で羽根がちぎれて落下するというお粗末な事故が2度も起き、2009年10月現在も停止しています。

廃風車の撤去費用を誰が出すのかさえ決めないまま、建設だけが強行される事例がたくさんあります。民主党政権は目下、風力発電を含めた「新エネルギー」を推進していますが、近い将来、間違いに気づき、政策転換をするかもしれません。その後、倒産した風力発電事業者に、廃風車を撤去する余力はありません。さて、最後は誰がこれを片づけるのでしょうか。地元自治体が片づけるということにでもなれば、大変な財政負担がかかってきます。

●全国の建設予定地では、今、何が起きているのか？

最初は環境にいいと思って誘致したものの、とんでもない代物だということが分かってきて、建設を受け入れないと表明する自治体が増えています。地元の将来を考えれば当然のことです。間違いに気づいたとき訂正できない人間は、政治や行政に関わる資格がありません。

26.4平方キロ（川内村の7.5分の1）に約4000人が住む佐世保市の宇久島には、出力2000kwの風車を50基も建てるという計画があります。島の診療所で島民の健康を守るA医師（現在13年目）は、「医師の立場として」島内を周り、住民に風車病の恐ろしさを説明しています。

A医師が「風車がここに建てば、自分自身の健康に自信が持てなくなり、ひいては患者の診療ができなくなる。もし風車が建つようなことになれば、私は宇久を離れて他の島へ移る」と言明しているため、島民も、ことの重要性に気づくようになりました。6月下旬の時点で、島民有権者約2500人の72%にあたる1818人分の反対署名を集めました。この反対運動に対して事業者は、「嘘っぱちを並べたパンフレットを配布して集めた署名は無効だ」と主張しました。しかし、島民は事業者の言葉より、島の医師の言葉を信じたのです。



↑増子輝彦経産省副大臣に要望書を提出する加藤登紀子さん

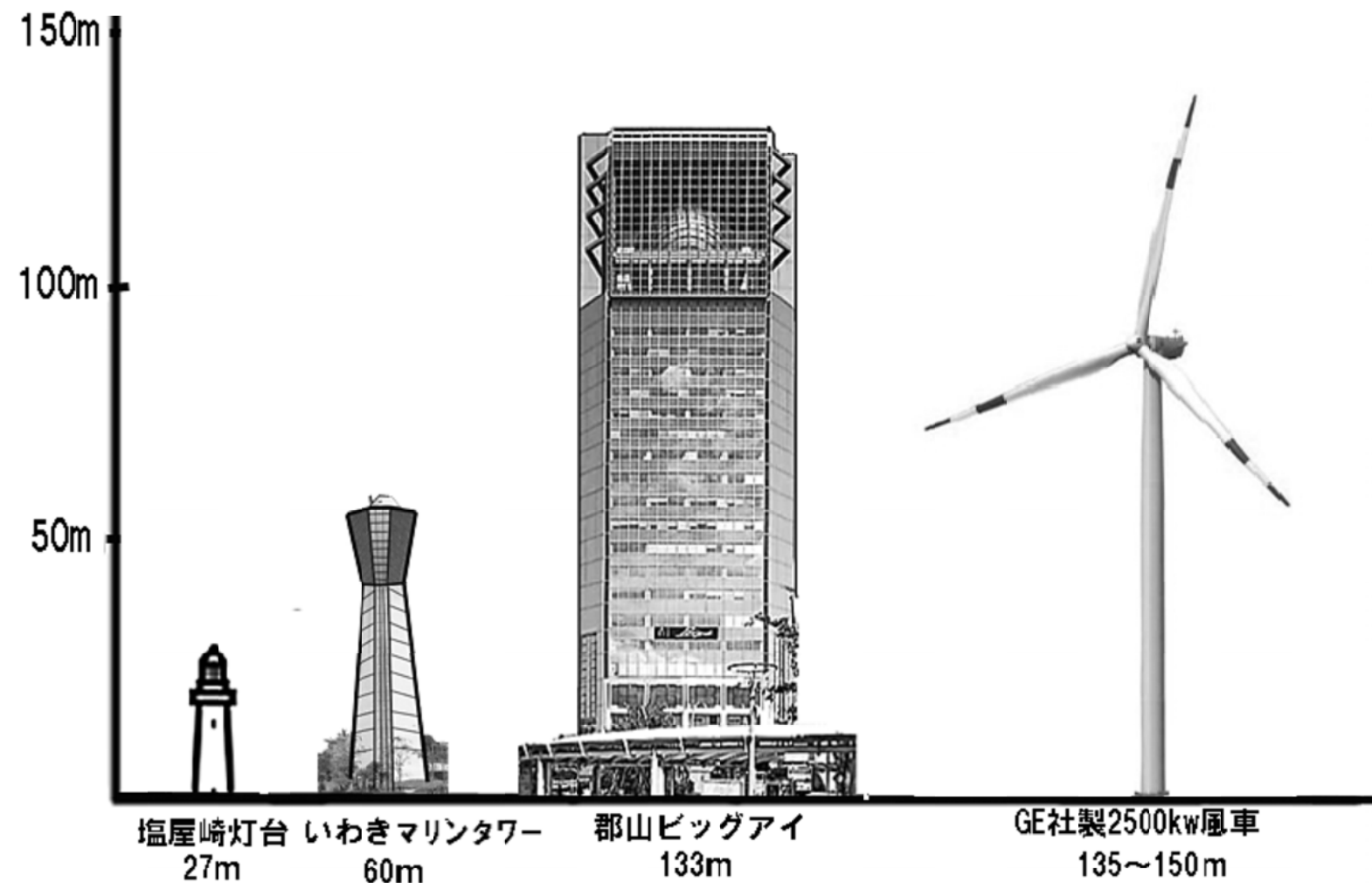
2009年10月7日、国連環境計画特使でもある歌手の加藤登紀子さんの呼びかけにより、全国94の団体・個人が連名で、経済産業省に、風力発電施設への補助金凍結を求める要望書を提出しました。

このように、風力発電の虚構は、徐々に暴かれつつあります。川内村を取り囲む形で、すでに37基の大型風車が建設着工しています。これ以上増えたとき、一体どうなるのでしょうか。

（文責：鐸木能光 川内村上川内在住）

★<http://no-windfarm.net/> に、随時情報を掲載・更新しています。

郡山ビッグアイより高い風車が26基 生コン車3000台分のコンクリートが 大津辺・黒佛木の水源地に流し込まれる



川内村を取り囲む形で、4つの巨大風力発電施設建設が計画、および建設が進行しています。

- ①滝根小白井ウィンドファーム 2000kw風車を23基 建設中
- ②檜山高原風力発電 2000kw風車を14基 建設中
- ③CEF福島黒佛木ウィンドファーム 2500kw風車を26基
- ④CEF福島檜葉ウィンドファーム 2500kw風車を16基

これが完成すると、どのようなものが出現し、私たちの暮らしがどうなるのかをまとめてみました。

一旦動き始めた計画を止めることはまず無理です。影響を受ける住民としての意思はその前に示さなければなりません。



↑滝根のセブンイレブン前から見た万太郎山の風景。最初の一基が建ったところ(2009年10月4日撮影)

川内村の水源地である大津辺山・黒佛木山山頂を取り囲む約500haという広大な林に、生コン車3000台分のコンクリートを流し込み、いわきマリントワーの倍以上の建造物を26基建てるという計画を受け入れたらどうなるのでしょうか。すでに建設が進んでいる滝根小白井、檜山高原の巨大風車群合計37基は、もうすぐ稼働します。